

ヤスパーズ『精神病理学総論』における「心的局在論」批判

— 脳と心の間をめぐって —

中山 剛 史

現代の脳科学の前提には、「心は脳の機能にすぎない」という「唯脳論」と、「心は脳の中の特定の部位に局在する」という「心的局在論」とが見られるが、はたしてわれわれの心はすべて脳の機能に還元されてしまうものなのだろうか。ヤスパーズは『精神病理学総論』の中で、ヴェルニッケらの「脳神話」や「心的局在論」を批判しているが、その論点は、心という「全体」は脳の「部分的機能」には還元されえず、「無限に包括するもの」としての心は脳より以上である、というものである。したがって、「心的局在論」の誤謬は、人間の心を自然科学的次元という一つの平面から因果論的に「説明」し尽くせると考えたことにある。こうした独断的な「全体知」を批判して、多面的・複眼的視野を保ちつつ、無限に「開かれた地平」をうち開いていこうとする姿勢には、前期・後期を含めたヤスパーズ哲学全体を貫く〈開かれた真理探求の無限の運動〉としての「理性」の根本的モチーフが見てとれよう。

(玉川大学専任講師)